

夏休みにおける 子どもの交通事故を防止しましょう

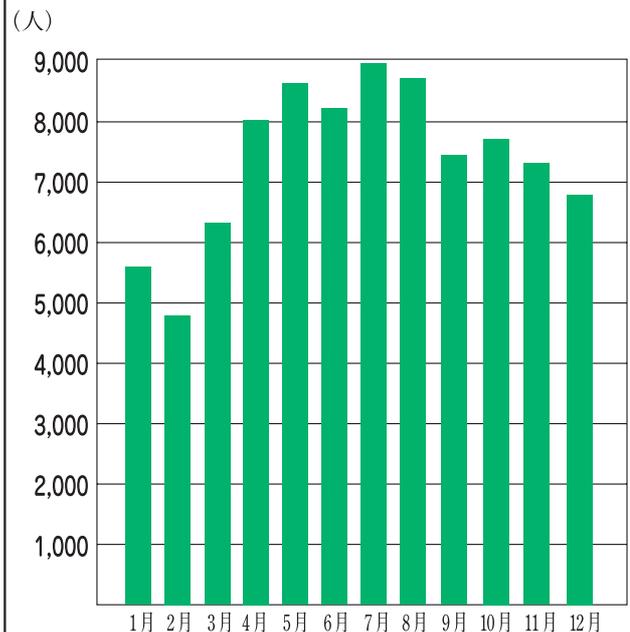
7月下旬から8月にかけての夏休み。子どもたちは家族と出かけたり、友達と一緒に遊んだり、外出する機会が増えます。そして休みという解放感からも交通事故に遭う割合が高くなります。ここでは、交通事故のデータを基に、夏休みに子どもたちが交通事故に遭わないためのチェックポイントを紹介するので、家庭や学校、地域などで交通ルールやマナーについて子どもたちと確認し合ひましょう。また、ドライバーの皆さん、夏休み中の運転は、いつも以上に子どもたちに気を付けるようにしてください。

夏休みに増加する

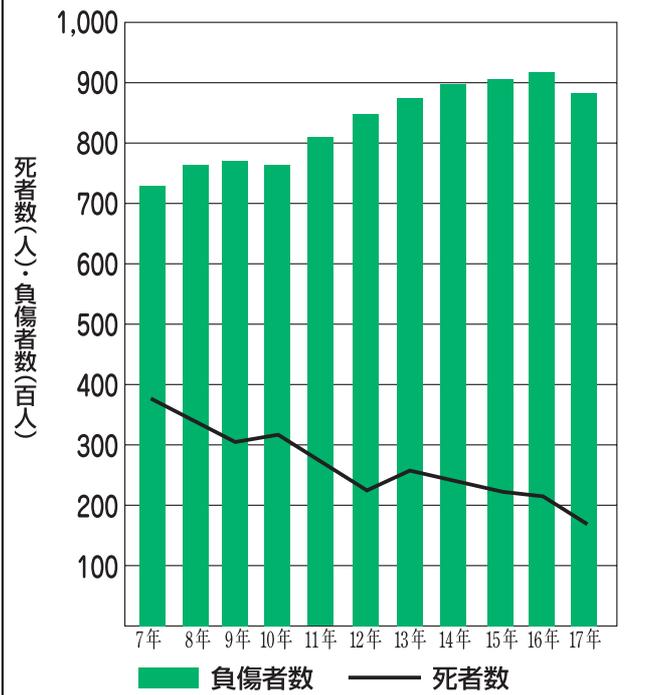
子どもの交通事故死傷者

平成17年の15歳以下の子どもの交通事故死傷者数を、月別でみてみましょう（第1図参照）。年間で子どもの死傷者数が最も多いのが夏休みに当たる7月と8月で、7月に8,946人、8月に8,701人の子どもが交通事故の被害に遭っています。これは、外出する機会が増えたり、夏休みという解放感などが重なったりして、子どもの交通事故が増えるものと考えられます。近年、15歳以下の子どもの交通事故死者数は減り、平成17年中は182人でした。その一方、負傷者は増えていきます。平成17年中の負傷者（8,447人）は、前年をわずかに下回りましたが、10年前（平成7年）の約1.2倍になっています（第2図参照）。少子化が進む中、負傷者が増えているということは、高い割合で子どもが交通事故に遭っていることを意味しています。子どもを取り巻く交通情勢は、依然として憂慮すべきであり、子どもの交通事故が増えるこの時期、特に注意が必要です。

第1図 子ども（15歳以下）の月別死傷者数（平成17年）



第2図 子ども（15歳以下）の交通事故による死者・負傷者数の推移



年齢で異なる

交通事故の特徴

子どもの交通事故死傷者数を各年齢別でみると、7歳と15歳が特に多く、小学校入學や中学校卒業の時期に事故に遭いやすい傾向がみられます。また、各年齢についてどのような状態で事故に遭っているかをみると、1歳以下では「自動車同乗中」が圧倒的に多く8割を超えています。しかし、年齢が上がるにつれてその割合は減り、「歩行中」と「自転車乗用中」の割合が増えています。「歩行中」の死傷者数が最も多いのは7歳で、その年齢で事故に遭った約4割が「歩行中」の事故です。また、「自転車乗用中」の割合は、年齢が上がるにつれて増え、15歳では7割を超えています。

このように、子どもの交通事故の形態は発達段階によって異なります。乳幼児では「自動車同乗中」、幼児から小学校低学年では「歩行中」及び「自転車乗用中」、小学生高学年から中学生では「自転車乗用中」の事故の割合が高くなっています。